

《第7回国際シンポジウム報告5》 2005年7月9日(土)

セッションⅡ 「キッチュ／キラキラの文化誌」

内田忠賢*

趣旨説明

本セッションでは、大衆文化の諸相を、歴史的なプロセス、社会的な背景から考えることを目的とする。これまでの国際日本学シンポジウムにおいても、私が担当したセッションでは、大衆文化の諸相として、紙芝居、女子プロレス、大衆演劇、海外旅行(修学旅行)、国内外の都市祝祭(イベント祭り)を取り上げ、その分野の若手第一任者の報告者を招き、同様の視点から研究発表をしていただいた。

このようなジャンルの研究集会を繰り返し設定した私の意図は、4点ある。

- ①従来の多くの日本文化研究は、文学、芸能、絵画、音楽など様々な対象を扱うが、いずれも、一般大衆が受け入れ、素直に楽しむ日本文化と言いがたい。いわゆる上流階級や文化人が主に評価、推進し、庶民を啓蒙する文化・芸術という感じが否めない。
- ②私が企画した研究集会で扱う対象は、いずれも猥雑かつ下品で、日本文化としては低俗なものと考えられがちだが、一般大衆にとっての現代日本の文化として非常に重要と考えられる。
- ③明治初年以來の官学の伝統がある高等教育機関であり、社会的ステータスが高い本学では、大衆文化の研究をこれまで軽視(あるいは無視)してきたが、この辺りで学問上の守備範囲を柔軟に拡張すべきである。

④大衆文化研究は、社会学、歴史学、民俗学、文化人類学など様々な人文科学、社会科学の交流を促し、学際的な共同研究の可能性を提示できる。

さて、今回の研究対象は、菊人形と宝塚歌劇である。菊人形は、芸術的には人形のまがいもの、偽物であり、同時に、華道としては無視されるB級芸術と考えられてきた。まさに、キッチュの代表例である。しかし、長い伝統を持ち、一般大衆に愛されつづけてきたことも事実である。また、宝塚歌劇は多数の熱狂的なファンを集めるものの、そのキラキラ感やキッチュ感により舞台芸術として際物扱いされがちである。しかし、近・現代日本の代表的な芸術・芸能であり、現代の日本文化の代表例と言っても過言ではない。このキッチュ／キラキラな大衆文化を、楽しくかつ真面目に学問しようというのが、今回の企画である。それぞれの分野での第一任者を、報告者としてお招きした。実は、菊人形を研究する学者は、日本では一人しかいない。若手研究者の川井ゆう氏(武庫川女子大学・非常勤講師)である。菊人形研究で学位も取得され、日本唯一の菊人形研究書、ろう人形研究書の著者でもある。宝塚歌劇研究では、今回の報告者、津金澤聰廣先生(関西学院大学名誉教授／桃山学院大学特任教授)が、最高権威である。津金澤教授は、宝塚歌劇研究をはじめ、広くはメディア研究、生活文化論、近代社会史研究の分野で著名な方である。

報告者は文句なしの布陣であると自負している。また、それぞれの報告に対するコメント役

*お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授

は、本学教員に担当していただいた。川井報告には、生活科学部（生活文化）の宮内貴久助教授（民俗学）、津金澤報告には、大学院人間文化研究科（社会学）の坂本佳鶴恵教授である。新進気鋭の宮内助教授は、民俗建築や風水の研究で実績ある人物、坂本教授はメディア研究、家族研究で社会学界をリードする中堅の女性社会学者である。

本セッションが、本学の研究風土に刺激を与え、学風に多様なバリエーションが生まれるきっかけとなれば、企画者として、本望である。

付記

セッションを終えての愚痴をひとつ。本学で展開する講義や研究発表では見られないテーマ設定であり、重要な日本文化の問題として位置

付けたと自負していたにもかかわらず、当日、フロアの参加人数は予想外に少なかった。実際、非常にエキサイティングな報告であったので、残念至極である。宣伝が足りなかったのか、そもそも本学になじまないテーマ設定だったのか、企画立案者に魅力がなかったのか、参加者が少なかった理由は分からない。しかし、生真面目で地味なテーマを、生真面目で地味に研究するだけが、学問ではない。もっとも、少ないながらも、学外の若手研究者やマスコミの方が積極的にご質問下さったのは、とてもありがたかった。

とはいえ、私は、大学での講義や研究集会も、学者による「興業」であると確信している。「客」をどれだけ集められるかは、大学教員かつ学者の社会的使命である。個人的に、今後の大きな課題としたい。